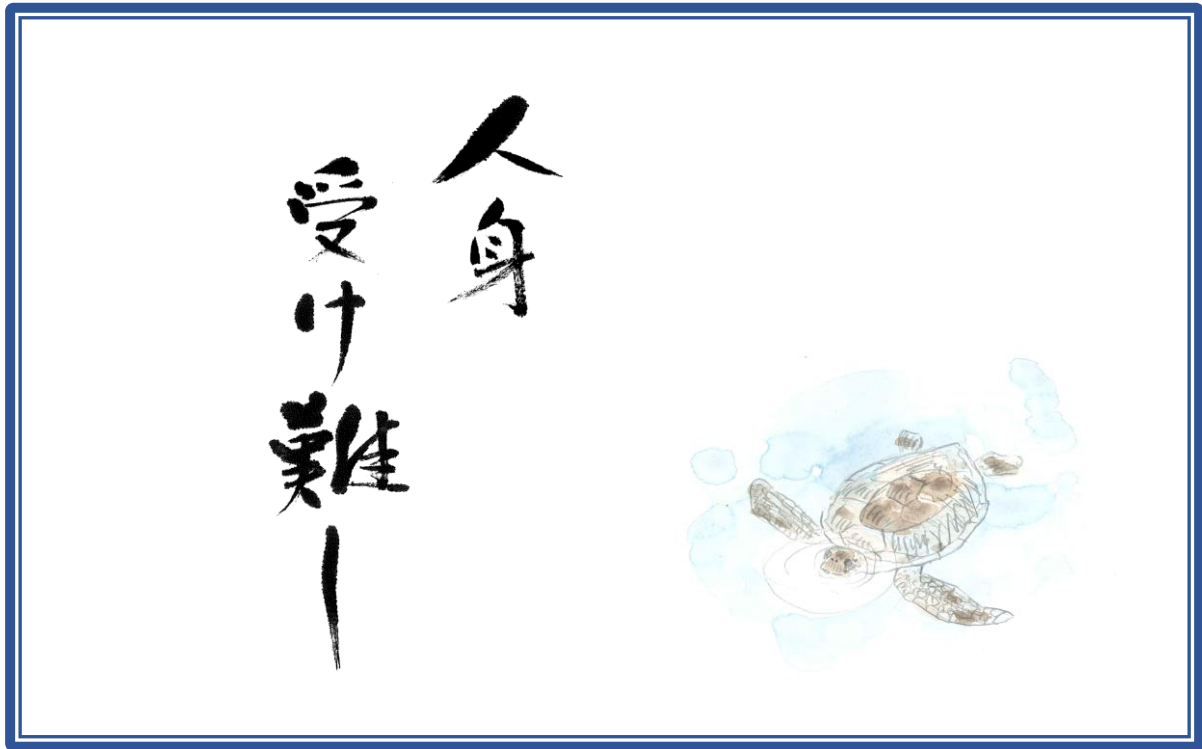


—平成30年 ^{ながつき}長月（9月）のことば—



『^{じんしん}人身^う受け^{がた}難し ^{いま}今^うすでに^う受く』

お釈迦さまは弟子たちに尋ねられました。「大海の底深く住む盲目の亀が、百年に一度海面に浮かび出るとしよう。そして節穴のあいた浮木が波間を浮遊している。百年に一度浮上する亀が、その浮木の穴に頭が入る確率はどれほどであろうか？」阿難尊者は答えます。「気の遠くなるほど確率は極めて低く、奇跡としか言いようがありません。」お釈迦さまは「私たちがこうして人として生を受けたことも同様に奇跡としか言いようがないのではなかろうか。」と諭されました。また別の場面では、大地の砂を一握りすくわれ左手の親指の爪の上にこぼされました。「大地の砂とこの爪の上端の砂とではどちらが多いと思うか？」と尋ねられました。「もちろん大地の砂の方が比べ物にならないほど多いと思います。」と弟子たちは口をそろえて答えました。「その通り。不可思議な縁でこの爪に残った砂は、我らの受けた生の不可思議に似ている。かけがえのないこのいのちを尊び、悔いなきように励みなさい。」と静かに語られました。

経典にはこのような比喩が幾たびも登場します。ほかにも3,000年に一度しか花開かぬ優曇波羅華（うどんげのはな）のごとき私たちのいのちの奇跡を讃えられもしました。人として生を受けたのも、成長も、日々の営みもすべて奇跡で、有ること難し、決して当たり前などではなく有難きことなのだ。だからこそ「空しく過ぐるなかれ」と警鐘を鳴らされるのです。この奇跡の意味を見極めて相応しい生き方をせよと願われたのでしょう。そのためには正しい師と正しい教えに導かれる必要があります。上の言葉には「仏法聞き難し、今すでに聞く」が連なります。奇跡の意味を深く探る時、風のささやきが、鳥のさえずりがお釈迦さまの声に聞こえるかも知れません。

『秋季巡教のご案内』

猛暑酷暑の夏でしたが、ようやく朝夕には涼風を覚えるこのごろです。皆さまいかがお過ごしでしょうか。常々正光寺の諸行事にはご参加いただきまして誠にありがとうございます。今回は秋のお説教会のご案内です。

大本山方広寺では毎年、他派の布教師さんをお招きして管長様の名代として末寺での布教活動を行っております。今年はその会場に正光寺が選定されました。日頃の行事とはまたひと味違った集いになるのではと思います。ここにご案内申し上げる次第です。檀家の有無を問わずどなたでもご参加頂けますので、是非とも行事予定に組み込んでいただければ幸いと存じます。

記

日 時：平成30年9月29日（土）午後2：00～3：00

会 場：正光寺本堂

会 費：無料

講 師：福井県小浜市 南禅寺派円照寺住職 村上宗博師

演 題：未定

内 容：般若心経唱和＝講演＝延命十句観音経

その他：お説教の前（1：00～2：00）に、本年度初盆各家の新牌お焚き上げ供養を行っておりますが、本堂内にてお待ち合わせ下さい。

以上、謹んでご案内申し上げます。 正光寺住職 松尾正澄合掌